

# 生の実践としての「徳」(ἀρετή) —オリゲネスにみる理解から—

梶原 直美

## (和文要旨)

聖書解釈を中心に多くの神学的著作を遺したギリシャ教父オリゲネス(185-254/5年)には、その生き方に、「徳」(ἀρετή:アレテー)という側面がしばしば指摘される。実際にそのあり方は、とくに彼のもとで学ぶ人々にも大きな影響を与えるものであった。

しかし、この徳性はそれ自体を目的とするものではなく、神との合一といった最終的な目的に到達するための手段として重視され、志向されたと理解されることがある。オリゲネスの思想には従来様々な評価がなされてきたが、本稿はこの点をめぐって考察する。すなわち、オリゲネスの生き方における実践的な徳の位置づけについて、オリゲネスの門下生であったグレゴリオス・タウマトウルゴスの『謝辞』からオリゲネスの人物像を探究し、キリスト者オリゲネスによる護教的な『ケルソス反駁論』のほか、聖書に基づいた理解を期待し得る聖書注解書、事柄ごとの体系的な思想が提示されている『諸原理について』、そして生の実践における思想が期待できる『祈りについて』などのテキストから、オリゲネスの徳概念をめぐって考察する。

## (Summary)

Origen, a Greek Church Father (185–254/5) who left numerous theological works on Biblical interpretation, is often noted for the virtue (ἀρετή) that he displayed in his life. Indeed, he had a great influence on his students in this respect.

However, in Origen's thought, morality is considered to be an important means of reaching the ultimate goal. We will argue that Origen's reputation for morality stems mainly from his widespread thought on the topic, which has never been evaluated thoroughly. To be more specific, we will consider the practical virtues in his life as reported in "Oration and Panegyric Addressed to Origen," written by Origen's student, St. Gregory Thaumaturgus. We will also attempt to explore Origen's concept of virtue through his "Against Celsus", his Bible commentaries, which will illuminate his Biblical

understanding of virtue, “On First Principles,” which will demonstrate his systematic theology, and “On Prayer,” from which we will attain a clue as to his practical ideas on virtue.

### はじめに

聖書解釈を中心に多くの神学的著作を遺したギリシャ教父オリゲネス (185-254/5) には、その生き方に、「徳」(ἀρετή: アレテー) という側面がしばしば指摘される。実際にそのあり方は、彼のもとで学ぶ人々にも大きな影響を与えるものであった。オリゲネスを師と仰ぐグレゴリオス・タウマトウルゴスの叙述からは、極めて明確に、その影響力の大きさを確認することができる。

このようにオリゲネスが体現し、他者へも大きな影響を与えた徳行は、オリゲネスにとって、それ自体が志向されたものではなかったと理解されている。たとえば、A.メレディスは、オリゲネスをプラトンやアリストテレスと並置し、彼らにとって「道徳的な善き生」とは、目的自体ではなく「光・真理・知解への入り口」であったと述べている。<sup>1</sup>また、L.ラーセンも、オリゲネスにとって徳は、魂が自身の状態を整え、放浪をやめ、自発的に上昇を目指すことを学ぶためのプロセスであったと認識している。<sup>2</sup>すなわち、この徳性はそれ自体が目的とされたものではなく、神との合一といった最終的な目的に付随する状態として理解されている。オリゲネスにとって「徳」とは、最終的な目的に至るプロセスにおいて通過する、ひとつの要素だったのであるか。

宗教が徳の実践と関わるという現実には歴史のなかにも確認されることであり、たとえ顕著な働きではなくても、たとえばその宗教の提示する道徳的な規則や定言の遵守は、教育や教化の成果を生じさせる。それゆえそこに、社会にとっての宗教への意味づけや期待がなされることもある。

オリゲネスがキリスト教という宗教のもと、神への揺るぎない信仰を持っていたことは、彼の著作に明白である。そして、その著作のなかで徳について言及し、自らそれを実践している。では、その徳の実践とはどのようなものであり、オリゲネスはそれをどのように理解していたのか。

### 1. オリゲネスの「徳」に関する研究から

T.コーブッシュは、歴史の流れのなかで背景の哲学思想による影響とともにオリゲネスの徳概念を提示した研究において、オリゲネスの徳理解について論じている。そこでは、オリ

---

<sup>1</sup> A. メレディス著、津田謙治訳『カッパドキア教父：キリスト教とヘレニズムの遺産』、東京：新教出版社、2011年 (Meredith, Anthony, *The Cappadocians*, St. Vladimir's Seminary Press, 1995)、113-114頁。

<sup>2</sup> Larsen, Lillian, “virtue”, in: McGuckin, John Anthony ed., *The Westminster handbook to Origen*, Louisville/ London: Westminster John Knox Press, p. 214r. ラーセンによると、それは自己吟味を伴う。また、「真の善」を目指すことであり、自らには感情、正義、勇気、分別という四元徳に加え、忍耐と聖性という徳も加えられたことも指摘する。この徳の道は、神との協働により歩めるのであり、そのさい、神を模倣することによって神の性質に参与する。

ゲネスが神に善と自己知を帰すストア派<sup>3</sup>の原理を取り入れつつも、聖書に基づいてそれを再解釈したことが指摘される。コーブツシュによれば、たとえば、神の善と人間の善とは異質ではなく同じ本性であると理解され、「天の父が完全であるように、あなたがたも完全でありなさい」<sup>4</sup>という、善なる神への同化<sup>5</sup> (ὁμοίωσις Θεῷ : ホモイオーシス・テオー) を促す聖書のことばは、善の表現である徳性をとおして成就されると認識されている。<sup>6</sup>このように、オリゲネスが信仰者の目指す目標とし、グレゴリオスがキリスト教の特性と考えた神への同化は、合理的に了解され得るのである。完全な徳を求め、すなわちそのようにして神に参与することにより、人間は徐々に変化する。<sup>7</sup>コーブツシュは、オリゲネスにとって神に参与する明らかな方法が善の実践であったことを明示するが、徳およびその実践そのものに関するオリゲネス自身の認識は明らかにしていない。

また、C.ヘングスタマンは、オリゲネスの徳概念を、オリゲネスの思想のなかでとらえようとしている。そこでは、人間の魂は聖書に示されている神の法に従うべきであり、それは神の法が、神の像を実現する「真の人生」に向けて歩ませるからであるというオリゲネスの理解が挙げられ<sup>8</sup>、徳がキリストの本性であり<sup>9</sup>、人を神により似せていく、神への参与をもたらす実践として言及されていることを指摘している。<sup>10</sup>ヘングスタマンによると、この徳の実践そして、魂が最終的に到達する徳の完全性は、オリゲネスにとってロゴスと一致することであり<sup>11</sup>、愛の実践が最高の徳である<sup>12</sup>。これら徳の実践において根本であり、目標でもあるのがロゴスであると理解されている。その実践に応じて、人間はロゴスに似るのでなく、ロゴスと同一化する。<sup>13</sup>このように、ヘングスタマンは、ロゴスに従い、ロゴスに同化していくことで神との一致に向かう、というオリゲネスの理解を提示し、そのための実践の価値も評価している。しかし、この研究もまた実践そのものに対してではなく、神との一致

---

<sup>3</sup> ストア派がプラトン主義の神概念を取り入れていることについて指摘される。 Kobusch, Theo, *Die Univozität des Moralischen: zur Wirkung des Origenes in Deismus und Aufklärung*, in: Anders-Christian Jacobsen eds., *Origeniana Undecima: Origen and Origenism in the History of Western Thought*, Leuven/ Paris/ Bristol, CT: Peeters Pub & Booksellers, p. 29.

<sup>4</sup> Cf. Matt. 5, 48.

<sup>5</sup> 神への「同化」とは、最終的な神との合一へ向かう動的状態を示す。これは神に似ていく変化であり、神化を意味する。

<sup>6</sup> Kobusch, Theo, op. cit., pp. 29-32.

<sup>7</sup> Ibid., pp. 33.

<sup>8</sup> Hengstmann, Christian, *Leben des Einen – Der Tugendbegriff des Origenes*, in: Horn, Friedrich W., Ulrich Volp und Ruben Zimmermann, *Etische Noemen des frühen Christentums*, Tübingen: Mohr Siebeck, 2013, p. 441.

<sup>9</sup> Ibid., p. 445.

<sup>10</sup> Ibid., p. 446.

<sup>11</sup> Ibid., p. 453.

<sup>12</sup> ただし、愛の実践が最高の徳であるということの典拠は、オリゲネスの著書の内容から示されてはいない。 Ibid., p. 449.

<sup>13</sup> Ibid., p. 446.

に向けた歩み方としての価値づけについて述べているのであり、徳の実践自体に関するオリゲネスの立場や考えについては明らかにしていない。

本稿では、以下において、オリゲネスの徳実践に関する証言と、オリゲネス自身の徳理解と徳実践について、複数の著作から考察することにする。

## 2. オリゲネスの「徳」実践—グレゴリオス・タウマトウルゴスの『謝辞』から

ここでまず、オリゲネスの元で学んでいたグレゴリオス・タウマトウルゴスの目から見たオリゲネスについて、『謝辞』<sup>14</sup>に書かれた彼自身の言葉をもとに確認したい。それは、彼が、教育を受けた者としてオリゲネスの思想の影響を受けたであろうこと<sup>15</sup>、また、身近にオリゲネスと関わった者としてこの師への思いを持ったであろうことから、徳を実践するオリゲネスについての手がかりを、この文書が与えてくれると考えるからである。

法律家を目指していたグレゴリオスは、期せずして聖書を注解し哲学を講じるオリゲネスのもとで学ぶこととなった。最初は気が進まなかったものの、グレゴリオスは「あたかも矢をもって射抜かれた如くに、かれの言によって射抜かれた。けだし、かれにはどこか柔しい恩愛と人を動かさねばやまぬ力と必然とが渾然としてあった」<sup>16</sup>のであり、以後、オリゲネスに惹かれていったことが述べられている。

学問の方法については徹底的で執拗な議論の様子が説明されているが、実際グレゴリオスははじめ、これらを苦痛だと感じていたようである。<sup>17</sup>しかし、グレゴリオスはこれによって真理のこぼれを受けるにふさわしいものとされたと理解し<sup>18</sup>、そのためのオリゲネスの惜しめない労力に、「真の意味での幸福なもの」<sup>19</sup>にしようとする意図を認識する。そこに展開されていたものは「他のすべての学問また長期間の哲学研究からの善き果実として、神々しき徳即ち倫理的徳をば採集する学問」<sup>20</sup>であり、「これにより心の衝動を鎮めて、乱れざる境地を得るのである」。<sup>21</sup>グレゴリオスはこのオリゲネスとの議論をとおして、自身が変化したことを伝えている。<sup>22</sup>人間の「善い方の部分から生ずるものはすべて善であ」<sup>23</sup>り、そ

---

<sup>14</sup> Gregorius Thaumaturgus, *OratPaneg*, in: *TLG*, 2063.001.

<sup>15</sup> たとえば、「よきサマリア人のたとえ」に関するグレゴリオスの理解に、オリゲネスの解釈が創造的に反映されているとみなされている。Roukema, Riemer, *The good Samaritan in ancient Christianity*, in: *Vigilliae Christianae*, 58(1), 2004, p. 67.

<sup>16</sup> *OratPaneg* 6: ...βεβλημένοι μὲν ὡσπερ τινὶ βέλει τῷ παρ' αὐτοῦ λόγῳ καὶ ἐκ πρώτης ἡλικίας (ἦν γάρ πως καὶ ἡδεῖα τινὶ χάριτι καὶ πειθοῖ καὶ τινὶ ἀνάγκῃ μεμιγμένος), στρεφόμενοι δὲ πως ἔτι καὶ λογιζόμενοι,..., (*TLG* 2063. 001. 6, lines 33-36.)

<sup>17</sup> Cf. *OratPaneg* 7.

<sup>18</sup> Cf. *OratPaneg* 7.

<sup>19</sup> *OratPaneg* 9: ὄντως καὶ μακαρίους (*TLG* 2063. 001. 9, lines 8-9.)

<sup>20</sup> *OratPaneg* 9: ...τῶν ἄλλων ἀπάντων μαθημάτων καὶ φιλοσοφίας μακρᾶς καρπὸς ἀγαθοὺς ἐκδεχόμενον τὰς θείας ἀρετὰς τὰς περὶ ἧθος, (*TLG* 2063. 001. 9, lines 3-5.)

<sup>21</sup> *OratPaneg* 9: ..., ἐξῶν ἢ ἀτάραχος καὶ ὑσταθῆς τῶν ὁρμῶν τῆς ψυχῆς κατάστασις γίνεται. (*TLG* 2063. 001. 9, lines 5-6.)

<sup>22</sup> Cf. *OratPaneg* 9.

<sup>23</sup> *OratPaneg* 9: ἐκ τοῦ κρείττονος ἀνατέλλει ἡμῖν ἀγαθὰ ὄντα,... (*TLG* 2063. 001. 9, lines 30-31.)

れを育てることで「神々しい諸徳が魂に生じる」<sup>24</sup>。グレゴリオスはここで古代、四元徳を重んじたギリシャの賢人たちを示唆しながら、彼らが善悪に関する判断、行為に関する分別に通じていたとしても、実行を伴い得なかったのであり、しかしオリゲネスには智慧（φρόνησις：フロネーシス）<sup>25</sup>による実践を見出したことを告白している。議論だけでなく、実践するオリゲネスの行動は、グレゴリオスに大きな影響を及ぼした。<sup>26</sup>

「かくかれは善き生活を営む者の如何なる者であるかを、その言説をもって説明すると共に、これを自ら実践して、努めてその範を垂れたのであって、実に聖賢の典型とでもいいたいのである」<sup>27</sup>と述べるグレゴリオスの言葉には、善（すなわち徳）の実践者が善であることを示唆している。また、グレゴリオスはオリゲネスによって正義の実践に動かされるが、オリゲネスが正義を「魂の自律によって」<sup>28</sup>実践されるべきものと説明したことについて述べており、つまりオリゲネスは魂を自律可能なものと理解し、グレゴリオスらに説明していたことがわかる。これについて、徳の醸成には神の力が不可欠であるという認識も窺える。<sup>29</sup>グレゴリオスは、人間が生来その徳を得るに値しないながらも、オリゲネスが「いと熱烈な愛をもって徳を慕う者（ἔρωσ：エロース）たらしめた」<sup>30</sup>ために、徳行の点では未完成であるが、徳を求める者に変えられた、ということである。その原因は師であるオリゲネス自身の徳の実践に帰されている。<sup>31</sup>ここでは、徳を慕わしめるという点に、徳の働きを見ることができ。

グレゴリオスはまた、オリゲネスの学問的な姿勢が真理の探究に対して開かれ、寛容であったとも述べている。<sup>32</sup>そのような修学のすえ、オリゲネスのもとを立ち去るとき、グレゴリオスはこの『謝辞』を著した。彼によれば、ここでオリゲネスについて、「最も神々しいことであり、かれの中にある神に似たる性質」<sup>33</sup>を語ろうとしている。グレゴリオスにとって、オリゲネスのもとでの探求の日々は、「全く絶ゆることなき入神の経験」<sup>34</sup>に満ちたもの

---

<sup>24</sup> OratPaneg 9: παραγενέσθαι ψυχῇ τὰς θείας ἀρετάς,... (TLG 2063. 001. 9, lines 33-34.)

<sup>25</sup> OratPaneg 9 (TLG 2063. 001. 9, line 53.)

<sup>26</sup> E.g., OratPaneg 9; 11.

<sup>27</sup> OratPaneg 11: ἢ τοιοῦτον ἑαυτὸν παρασχέσθαι πειρώμενος, οἷον τοῖς λόγοις διέξεισι τὸν καλῶς βιωσόμενον, καὶ παράδειγμα μὲν, ἐβουλόμην εἰπεῖν, ἐκθέμενος σοφοῦ. (TLG 2063. 001. 11, lines 13-16.)

<sup>28</sup> OratPaneg 11: διὰ τὴν ἰδιοπραγίαν τῆς ψυχῆς (TLG 2063. 001. 11, lines 28-29.)

<sup>29</sup> Cf. OratPaneg 12.

<sup>30</sup> OratPaneg 12: ἐμπούσας ἔρωτα τῇ αὐτοῦ ἀρετῇ (TLG 2063. 001. 12, line 16.)

<sup>31</sup> Cf. OratPaneg 12.

<sup>32</sup> Cf. OratPaneg 15.

<sup>33</sup> OratPaneg 2: ὅπερ ἐν αὐτῷ συγγενές ὄν τυγχάνει θεῶ (TLG 2063. 001. 2, line 33.)

<sup>34</sup> この邦訳はやや不自然であるが、「すべてに及んで神が行きわたる」と理解できる。Cf. “The inspiration of divine things prevails over all continually.” (Gregory Thaumaturgos, Philip Schaff trans., In Origenem oratio panegyrica, in: Alexander Roberts and James Donaldson eds., *Ante-Nicene Fathers 6 Fathers of the Third Century: Gregory Thaumaturgos, Dionysius the Great, Julius Africanus, Anatolius, and Minor Writers, Methodius, Arnobius* [Christian Classics Ethereal Library], Edinburgh: T & T Clark, 1886, p.66.)

であり、「真にうましき樂園」<sup>35</sup>と形容されている。そして、グレゴリオスはこの文書を終えるさい、記述したすべてが正真正銘の事実であり、誠実さと正義のうちに高潔さをもって書き表したことを強調し、この内容の真正性を保証する。

なお、現実を回想するさい、グレゴリオスは置かれた現実のなかに自分を真理に導く力、すなわち神の意思の存在を確信し、謝意を述べている。ここには、オリゲネスのもとで学ぶことによる、グレゴリオスの現実認識の変化、神への信頼の涵養を認めることができる。他方、オリゲネスについても、彼の愛への言及と、それゆえ自らもまたオリゲネスに対して禁じ得ない愛が生じていることが述べられている。<sup>36</sup>

グレゴリオスの『謝辞』からは、このような、グレゴリオスの意識と行動に変化をもたらした、オリゲネスの徳理解と徳実践のあり方を認識することができる。そして、オリゲネスは身近に学んでいたグレゴリオスに深い感謝と喜びと感銘をもって想起されていたが、グレゴリオスに大きな変化を与えたその存在は、学問的な広さと深さ、人柄、徳の実践、また、それらによって徳自体への憧憬をグレゴリオスにもたらしたことが確認される。

では、オリゲネス自身にとって、徳はどのように理解され、実践されたのか。

### 3. オリゲネスの著作における「徳」概念

オリゲネスの思想には、中期プラトン主義による影響が指摘されるが、自身の論旨を展開するさい、彼は聖書に基盤を置き、そこからの解釈によって考察を進めている。これは、聖書の内容がオリゲネスにとって極めて重要であったからであるが、彼はその内容を字義の意味、道徳的意味、そして霊的意味という三段階において理解している。<sup>37</sup>この諸段階は、字義的内容に始まり、道徳的内容を経て霊的内容に至るのであり、魂の進歩と同調する。<sup>38</sup>

これに鑑みると、道徳的内容は聖書が示そうとする最終的な内容ではなく、その途上で示される内容であると理解され、道徳は聖書の意味を完全に示したものではないということになる。ゆえに、道徳は実際の生の実践にとって大きな意味を持つにもかかわらず、最終的

---

<sup>35</sup> OratPaneg 16: Οὗτος παράδεισος ἀληθῶς τρυφῆς (TLG 2063. 001. 16, line 1.)

<sup>36</sup> たとえば、「師の語り給うのを私が黙して聴き入ることを得たとは、何という美しい生活であったろう。」(Ὡς καλῶς ἔζων, ἀκούων λέγοντος διδασκάλου καὶ σιωπῶν : Panegyrica 16. [TLG 2063. 001. 16, lines 8-9.]) と述べられている。

<sup>37</sup> 同時に、体、魂、霊という三重の意味に解釈されるとの理解も見られる。Cf. PeriArchon IV, 2, 4.

<sup>38</sup> 魂は道徳的、知的、霊的な進歩により上昇し、魂の成熟度に応じて異なる教育を受けると理解されている。スコットによれば、オリゲネスは聖書のなかにも、たとえばソロモンの書に知的霊的段階に対応する三段階を見出し、箴言は道徳学、コヘレトは自然学、雅歌は観想学を教えるものと理解する。箴言では初心者として、コヘレトでは上達者として、最後に雅歌における完全な愛の人として歩むのである。Scott, Mark C. M., *Journey Back to the God: Origen on the Problem of Evil*, NY: Oxford University Press, 2012, pp. 118-119. nn.136-139. なお、オリゲネスにとって聖書を読むことは、「生けるロゴスへの愛の眼差しに満ちて彼に従う歩み」であり、「彼と一致する魂の浄化の営み」であったことが指摘される。宮本久雄『教父と愛智—ロゴス（言）をめぐる—』、新世社、<sup>2</sup>1990年、134頁。

に目指すものではないというオリゲネスの徳理解が推測される。

そうであれば、徳の実践はどれほどの重要性を持つのか。ここでは、彼の著作から、徳理解について考察するが、オリゲネスの思想には、その関心領域の広さおよび細微にわたる熟考により、非常に複雑であることや<sup>39</sup>、時を経るにつれ変化した可能性が指摘されている。<sup>40</sup>また、例えば、この世では完全性には到達できないという記述と、到達できるという記述が交錯する<sup>41</sup>といった齟齬も見られる。テキストそのものに関しても、翻訳にしか依拠できない制約もある。しかしながら、オリゲネスの徳実践への積極的態度は、生涯をとおして一貫性の揺らぎが指摘されないため、以下ではその行為を支える徳理解について考察を進める。

### 3.1. 魂の上昇を目指す今生の目的としての徳実践

オリゲネスは『民数記講話』を著すなかで、とくに 27-28 講において、旧約聖書の人物をアレゴリー的に解釈し、彼らの生を魂の旅程にたとえて描いている。この 27 講には、この生が「徳から徳へと」<sup>42</sup>通過するために存在とすると述べる内容を三箇所を確認することができる。<sup>43</sup>これは、先の生ではなく現在の生に対する意味付けであるが、今生を生きる目的が徳の実践とされている。ゆえに、魂の旅程である現世では、常に徳を実践し、徳の段階を上がっていくことが目指される。

### 3.2. 徳実践にふさわしい内的状態

オリゲネスは、そのような徳の実践が、それにふさわしい内的状態においてなされなければならないということを教示する。

たとえば『ヨハネ福音書注解』で、義しい人であれば義を追い求めるが、義を追い求める人が義しい人ということではないと主張する文脈のなかで、彼は「義しく」義を追い求めることの重要性を強調する。それは、義しきなしに義を追い求めることも可能だからである。その例として、貧しい人々に対する虚栄心からの施しが「義の習性からでなく虚栄からのこ

---

<sup>39</sup> Greer, Rowan A. trans. and intro., *Origen: An Exhortation to Martyrdom, Prayer, First Principles Book IV, prologue to the Commentary on the Song of Songs, Homily XXVII on Numbers*, NY/ Ramsey, Tronto: Paulist Press, 1979, pp. 27-28.

<sup>40</sup> C.ステッド著、関川泰寛、田中従子訳『古代キリスト教と哲学』、教文館、2015年 (Stead, Christopher, *Philosophy in Christian Antiquity*, Cambridge/ NY/ Melbourne: Cambridge University press, 1994.)、236頁。

<sup>41</sup> たとえば、「…多少の進歩を遂げるときもあれば、またあるときには完全さに至り、…」 (ContraCelsus IV, 64, 11) ; 「覚知と知恵、そして恐らく、他の諸徳能についても、『完全なものが到来』しないなら、実現することはありえないでしょう。」 (PeriEuchs 25, 2 : …) ; 「完成の域に達した人、すべての徳を有している人は、それぞれの完全性を得ているので、完全な知恵、完全な節制を有しており、敬神の念にしても他の [徳] にしても同様です。同じく、信じるという徳において完全な人は全き信仰を有していると言えるでしょう。」 (ComJohn XXXII, 15, 178)

<sup>42</sup> Cf. Ps 84, 8.

<sup>43</sup> HomNum 27, 5; 27, 6; 27, 7.

と」として挙げられている。これ以外にも思慮深さ、勇氣、知恵が同様に述べられている。オリゲネスはこれらの施し、思慮深さ等を「徳」と認識している。<sup>44</sup>

以上のように、ここでは、徳行にさいして、単に行為のみならずそれに伴う内的状態が問われている。別の箇所でも徳を実践するさいの内面に焦点が当てられ、「人々に義しい者と思われるためにすべてをなす人」が「肉の意思を満足させようとしている」人として問題視されている。<sup>45</sup>

また、徳は、「善きもの (καλὸν : カロン)」として、「第一原因」と並んで提示されている。<sup>46</sup>この「善きもの」について、オリゲネスは、「わたしたちは、パウロも述べているように、けっして恐怖によっては教育されず、善きものをそれ自体として選ぶすべての者は神の子」<sup>47</sup>であると理解している。そしてイエスについて、「徳のゆえに神の子とよばれているすべての人々よりも遥かにまさっているのであり、というのも彼はいわばこれらの源泉かつ端緒 (ἀρχὴ : アルケー) だからである」<sup>48</sup>と説明している。ここでは、恐れの原因を避けるがために、その回避の手段として善きものを選ぶことが拒絶され、善きものを選ぶ根拠として徳が提示されている。つまり、徳は、善きものを選ぶ根拠としても理解されている。

さらに、『フィロカリア』では、「一般に、善い (ἀγαθός : アガトス) 木のあらゆる実は、それが自身の努力に拠るものであるから、善である。たとえば、愛、平和、喜び、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制である。その反対の諸々は悪である。」<sup>49</sup>と述べられており、自身の意図的な選択の重要性が指摘されている。これは、前述のように徳自体を求めて選ぶことに加え、自らが自律的な主体として選ぶことを意味する。なお、別の箇所でも、徳の実践が自らによらず神によるものとする論敵の考えを、オリゲネスは拒絶している。<sup>50</sup>

徳の具体的内容については、「神聖なる言葉によれば、諸徳能の中で主要な一つの [徳能]

---

<sup>44</sup> Cf. ComJohn XXVIII,13,103.

<sup>45</sup> Cf. FragJohn 8.

<sup>46</sup> Cf. ContraCelsus I, 24.

<sup>47</sup> ContraCelsus I, 57: Πρὸς ὃν ἐροῦμεν ὅτι πᾶς μὲν ὁ, ὡς ὁ Παῦλος ὠνόμασε, μηκέτι ὑπὸ φόβου παιδαγωγούμενος ἀλλὰ δι' αὐτὸ τὸ καλὸν αἰρούμενος υἱὸς ἐστι θεοῦ. (TLG 2042. 001. 57, lines 4-6.)

<sup>48</sup> ContraCelsus I, 57: οὗτος δὲ πολλῶ καὶ μακρῶ διαφέρει παντὸς τοῦ διὰ τὴν ἀρετὴν χρηματίζοντος υἱοῦ τοῦ θεοῦ, ὅστις ὡσπερὶ πηγὴ τις καὶ ἀρχὴ τῶν τοιούτων τυγχάνει. (TLG 2042. 001. 57, lines 6-9.)

<sup>49</sup> Philocalia 26, 1: Καὶ ἀπαξ ἀπλῶς πᾶς καρπὸς δένδρου ἀγαθοῦ προαιρετικὸς ὢν ἀγαθὸν ἐστίν· ὡς «ἀγάπη καὶ εἰρήνη καὶ χαρὰ καὶ μακροθυμία, χρηστότης τε καὶ ἀγαθωσύνη καὶ πίστις καὶ πραύτης καὶ ἐγκράτεια»· τὰ δὲ ἐναντία τούτοις κακά. (2042. 020. 1, lines 22-26.) Cf. Gal. 5, 22.

<sup>50</sup> 論駁の対象となる内容について、「・・・有徳に生活するのも我々のわざではなく、あらゆる点で神の恵みのわざであるとみなされることになる。」 (PeriArchon III, 1, 15) と述べて斥けている。『フィロカリア』21, 14のなかでも、同じ聖書箇所の引用のもと、同様のことが述べられている。

は身近な者に対する愛 (ἀγάπη: アガペー) です。」<sup>51</sup>と述べられている。ここでは、苦しみや弱さのなかにある者らについて言及されており、それらの人々の苦難を共有すること、そしてそれを実践したキリストが模範として提示されている。<sup>52</sup>

また、徳は信仰と並列的に記されたり<sup>53</sup>、「信仰に基づく徳」といった表現をもって言及されたりしている。<sup>54</sup>さらに、徳行が敬虔さと並置されて述べられることもある。<sup>55</sup>これらは、人格的関わりにおける神への信頼に基づいて徳行がなされることを示唆する。

オリゲネス自身も、神への信頼のもとで祈りながら『祈りについて』を著述している。彼は祈りについて説明するなかで「絶えず禱る (προσευχή: プロセウケー) <sup>56</sup>」ことを勧めるが、そのさい徳の実践を祈りのなかに含め、実践と祈りとが協調する状態を奨励している。徳の実践は祈りであり、これにより、「絶えず禱る」ことが成立するのである。<sup>57</sup>

オリゲネスは同著のなかで、徳について8回触れているが、そのうちの1回では、徳行との連関においてパウロの言葉に言及し、以下のように述べている。

さて、絶えず禱る人は、徳行あるいは戒めを遂行することは祈りの一部として受け取っているのだ、その人は祈りを必要な業に、適当な行為を祈りに調和させるものです。そのようにしてのみ、わたしたちは「絶えず禱りなさい」[という勧告]を遵守することができるからです。聖なる人の全生涯は一つの大きな調和のとれた祈りである

---

<sup>51</sup> PeriEuchs 11, 2: μία δὲ κυριωτάτη τῶν ἀρετῶν κατὰ τὸν θεῖον λόγον ἐστὶν ἢ πρὸς τὸν πλησίον ἀγάπη· (TLG 2042, 008. 2, lines 5-6.)

<sup>52</sup> これは、愛の特徴を限定的に表現しているのではなく、弱い立場の者らのために祈る、という文脈によるものであると考えられる。

<sup>53</sup> たとえば、「(聖霊は、) 信仰も徳をも有している人々を満たす」(FragComJohn 37: τὸ πνεῦμα πληροῖ τοὺς πίστιν καὶ ἀρετὴν ἔχοντας,... [TLG 2042. 006. 37, line 7.])、「神からの[霊的]賜物は、信仰と徳によって、それを受けるよう準備された人々に与えられるのです。」(FragComJohn 44: δίδονται δὲ τὰ ἐκ θεοῦ χαρίσματα τοῖς πίστει καὶ ἀρετῇ πρὸς τὸ λαβεῖν αὐτὰ παρεσκευασμένοις. [TLG 2042. 006. 44, lines 5-6.])などの叙述が挙げられる。

<sup>54</sup> ComJohn XXXII, 16, 196: 全き信仰に基づく徳がいかに大なるものであるか (πηλίκη μὲν ἐστὶν ἢ κατὰ τὴν πᾶσαν πίστιν ἀρετὴ,... [TLG 2042, 005. 196, lines 6-7.])

<sup>55</sup> Cf. ContraCelsus 8, 55.

<sup>56</sup> オリゲネスのテキストには、「祈り」として一般に“εὐχή”が用いられるが、その一部に“προσευχή”という語が充てられることがある。ゆえに、本稿でオリゲネスのテキストに言及するさい、後者には「禱り」の訳語を充てることとした。なお、両者の語の詳細については、拙論『オリゲネスの祈禱論—《祈りについて》を中心に』、教文館、2017年、で論じている。

<sup>57</sup> なお、静寂主義とも訳されるヘシュカズムは、神との合一、即ち神化を目指し、砂漠の師父らの霊的修行の伝統に立つものであるが、そこにおいては祈りとその霊性を支え、その祈りは、パウロの「絶えず祈りなさい」との勧めにも支えられていることが指摘される。大森正樹「ヘシュカズムにおける神化の思想—パラマスを中心として—」『中世思想研究』35号、187頁。

と言えるなら<sup>58</sup>、そのように言うことができるはずです。<sup>59</sup>

究極的には神化を目指してささげられるオリゲネスの祈りには、このように、神を想起する祈りそのものと、徳の実践が認識されている。<sup>60</sup>

実際に、たとえばグレゴリオス・タウマトウルゴスの場合、オリゲネスのもとでの学びと交流を経験し、祈りも含めて徳の実践がなされていた。これらのことによってグレゴリオスに変容が生じたことは、上記のことと整合する。グレゴリオスの場合、さらには、徳自体を願うという変化も生じていた。

### 3.3. 徳実践そのものの幸い

つぎに、徳の実践をするさい、自己の決定に収まらない要素について、オリゲネスの叙述を確認する。

オリゲネスは『フィロカリア』のなかで、次のように述べている。

何らかの目的のために存在するあらゆるものは、その目的ほど重要ではない……もしある恵みを得るために何らかの戒律を守らねばならないのなら、また、報酬が身体的かつ外的なものであるなら、その善行はそれ自体が究極的な善ではなく、単に善を生じさせるものであろう。<sup>61</sup>

何かの手段的意味合いを有する善行を究極的な善ではないとするこの言葉は、魂の完成

---

<sup>58</sup> 小高は、このような考えがアレクサンドリアのクレメンスをはじめ、多くの教父たちに看取されることを指摘している。小高毅「解説の註」34、オリゲネス著、小高毅訳『祈りについて・殉教の勧め』、創文社、1985年、235頁。

<sup>59</sup> PeriEuchs 12, 2: „ἀδιαλείπτως“ δὲ προσεύχεται, καὶ τῶν ἔργων τῆς ἀρετῆς ἢ τῶν ἐντολῶν τῶν ἐπιτελουμένων εἰς εὐχῆς ἀναλαμβάνομένων μέρος, ὁ συνάπτων τοῖς δέουσιν ἔργοις τὴν εὐχὴν καὶ τῇ εὐχῇ τὰς πρεπούσας πράξεις. οὕτω γὰρ μόνως τὸ „ἀδιαλείπτως προσεύχεσθε“ ἐκδέξασθαι δυνάμεθα ὡς δυνατόν ὄν εἰρημένον, εἰ πάντα τὸν βίον τοῦ ἁγίου μίαν συναπτομένην μεγάλην εἴποιμεν εὐχὴν· ἢς εὐχῆς μέρος ἐστὶ καὶ ἡ συνήθως ὀνομαζομένη εὐχή, οὐκ ἔλαττον τοῦ τρις ἐκάστης ἡμέρας ἐπιτελεῖσθαι ὀφείλουσα. (TLG 2042. 008. 2, lines 1-8.)

<sup>60</sup> ただし、靈的完全性がこの生においては完成しないという考えもオリゲネスに指摘される。たとえばそれは、A.G.パドルの論述に見られる。Paddle, Alan G., “Mystical thought”, in: McGuckin, John Anthony ed., *The Westminster handbook to Origen*, Louisville/ London: Westminster John Knox Press, p. 157r.

<sup>61</sup> Philocalia 26, 6: οὕτω τοῖνον καὶ εἰ τάσδε τὰς ἐντολάς τηρητέον ὑπὲρ τοῦ τῶνδε τῶν ἀγαθῶν τυχεῖν, τὰ δὲ ἄθλα τὰ σωματικά ἐστὶ καὶ τὰ ἐκτός· αἱ ἀγαθαὶ πράξεις ἔσσονται οὐκ ἀγαθαὶ ὡς τελικαί, ἀλλ’ ἢ ἄρα ὡς ποιητικαὶ ἀγαθῶν· καὶ ἔσται διαφέρων ὁ πλοῦτος, ὄν οἶνται ἐπαγγέλλεσθαι τὴν γραφὴν, καὶ ἢ τοῦ σώματος ὑγεία, τῆς δικαιοσύνης καὶ αὐτῆς δὲ τῆς ὀσιότητος καὶ τῆς εὐσεβείας καὶ τῆς θεοσεβείας τῶν τηλικούτων ἀνδραγαθημάτων. (TLG 2042. 019. 6, lines 12-20.)

という究極目的に向かっての徳行の価値を減じるもの、という理解が推測されるかもしれない。しかし、この箇所言葉の背景には、物質的な富や健康を重視する人々への批判という意図があり、「富と身体の健康が高潔さや徳行を凌ぐというなら、それは最も愚かである」<sup>62</sup>と断定されている。つまり、ここではむしろ、徳実践の重要性が擁護されている。

オリゲネスは、このような徳の実践を「神における幸いな生活」<sup>63</sup>と述べている。これは『ケルスス駁論』のなかで、ケルススがイエスによる癒しの事実を認めないことへの批判として述べられた箇所の一部であり、癒しの幸いを超えて幸いなこととして提示されている内容である。ここでオリゲネスは、「魂の目が見えない人々の魂の目が常に開かれ、徳の話に対して聞く耳を持たない人々の耳が神や神における幸いな生活について熱心に開かれ、…」<sup>64</sup>と述べているが、「神における幸いな生活」とは徳の実践を指している。ゆえに、徳の実践により、現在の生の先の目標でなく、眼前の生活そのものに対する「幸い」の実現が提示されていることになる。すなわち、魂の進歩の末の神との合一の幸いでなく、徳行そのものの幸いが教示されているのである。

また、別の著作では、「徳は、それを有している人を恵まれたものとする恵みですから」<sup>65</sup>とも述べられている。「それを有している人を恵まれたものとする」というのは、徳を有している今このときに恵みが与えられることを述べているものと理解し得る。前項の内容を前提とするなら、この徳を行うことによっていま実現する「幸い」や「恵み」は現在の徳実践に対して将来与えられる報酬としてではなく、行為そのものに含まれる自然な状態として言及されていると考えられる。<sup>66</sup>すなわち、徳の実践そのものに幸いとしての性質が含まれているということである。

ここで、「現在」に関するオリゲネスのひとつの見方を確認しておきたい。オリゲネスは『祈りについて』のなかで主の祈りの注解を行っているが、「糧を今日お与えください」の「今日」に関する説明の最後のほうで、次のように述べている。

---

<sup>62</sup> Philocalia 26, 6: πάντων γάρ ἐστιν ἀτοπώτατον τὸ τῶν ἀνδραγαθημάτων λέγειν διαφέρειν τὸ πλουτεῖν καὶ τὸ ὑγιαίνειν σωματικῶς. (TLG 2042. 019. lines 22-24.)

<sup>63</sup> Cf. n. 64.

<sup>64</sup> ContraCelsus II, 48: Ἀεὶ γὰρ ἀνοίγονται ὀφθαλμοὶ τυφλῶν τὴν ψυχὴν, καὶ ὅτα τῶν ἐκκεκωφημένων πρὸς λόγους ἀρετῆς ἀκούει προθύμως περὶ θεοῦ καὶ τῆς παρ' αὐτῷ μακαρίας ζωῆς, ... (TLG 2042. 001. 48, lines 38-40.)

<sup>65</sup> FragJohn 11: ἐπεὶ οὖν ἡ ἀρετὴ χάρις ἐστὶ κεχαριτωμένον ποιῶσα τὸν ἔχοντα, ... (TLG 2042. 006. 11, line 13.) ここで、「恵まれたものとする」(ἐστὶ κεχαριτωμένον)は現在時制となっている。

<sup>66</sup> 魂の完成に関するオリゲネスの考えについて、有賀は時間の経過に伴う浄化という、ヘブライ的な時間の概念が背景にあることを指摘する。有賀鐵太郎『キリスト教思想における存在論の問題』、創文社、1981年、330-348頁。ゆえに現在の生と最終的な段階では魂の状態は異なる。しかしその時々で、魂の状態に応じたそれぞれの幸いに与ることができるという理解を、ここに見ることができる。

…どうして、これほど偉大な代の [一] 日の [一] 時間という微小な部分を軽々しく扱うことができるのでしょうか。彼はむしろ、ここでの準備によって、今日という日に、しかも「毎日」…万事を尽くすのではないのでしょうか。<sup>67</sup>

これに続いて、毎日を「今日」として祈るなら、想像を超えた豊かさが与えられると続く。これに関しては、将来与えられるもののために現在を使うという理解も可能かもしれない。しかし「今日」、つまり目の前に与えられているその時に、「万事を尽くす」ことが示唆されている。それは可能な範囲内での最善な歩みを意味し、現在における徳の実践を意味すると理解し得る。

以上、現実の生における徳の実践における幸いについて考察してきたが、オリゲネスは『祈りについて』のなかで、以下のようにも述べている。

…完全に神のみ名が聖なるものとされること及び完全にみ国が来ることは、覚知と知恵、そして恐らく、他の諸徳能についても、『完全なものが到来』しないなら、実現することはありえないでしょう。<sup>68</sup>

これは主の祈りの注解部における叙述であり、文脈としては、自分たちが完成を目指すプロセスに置かれていることに焦点が当てられている。ここでの「諸徳能」は、祈り求められる対象として言及されている。しかしオリゲネスは明確に、現在が完全ではないという前提に立っている。ゆえに、諸徳能もその実践もまた完全ではありえない。

## おわりに

以上、オリゲネスの徳行および徳概念をめぐって考察を行ってきた。

まず、彼の著作のなかには、徳を重視する記述が多く、そこには、最終的な魂の目的地を見据える視点があったことが確認された。そのために、魂の進歩が必要であり、徳の実践はそのためのプロセスとなる。

この徳を実践するさいには喜びが生じると考えられていた。それはしかし、喜びを得るために徳を選ぶのではなく、徳の実践のなかに喜びを得させる性質が含まれ、実践そのものが喜びであると換言できるであろう。

この徳の実践は、将来の魂の完成のために不可欠であるが、オリゲネスはそれを、現在の生において考え、実践していることが、著作内容の検討により確認された。徳は結果を得るための単なる手段ではない。なぜなら、徳の実践こそが現在のリアルな生のプロセスを歩むうえでの最重要事項であり、善なる神の与えてくださったキリストを模倣すること

---

<sup>67</sup> PeriEuchs 27,16: πῶς δύναται μικρολογῆσαι περὶ τοῦ ἐλαχίστου μορίου ὥρας τῆς τοῦ τηλικούτου αἰῶνος ἡμέρας καὶ οὐχὶ πάντα ποιήσει, ἵνα ἀπὸ τῆς ἐνταῦθα παρασκευῆς ἄξιος γενόμενος τοῦ τυχεῖν τοῦ ἐπιουσίου ἄρτου ἐν τῇ „σήμερον“ ἡμέρᾳ λάβῃ αὐτὸν καὶ „καθ’ ἡμέραν“, ἥδη σαφοῦς ἐκ τῶν προειρημένων γινομένου τοῦ „καθ’ ἡμέραν“; (TLG 2042. 008. 16, lines 8-12.)

<sup>68</sup> PeriEuchs 25, 2: οὕτως „τὸ τέλειον“ τοῦ ἀγιασθῆναι ἐκάστῳ ἡμῶν „τὸ ὄνομα“ τοῦ θεοῦ καὶ τοῦ ἐνστήναι αὐτοῦ τὴν βασιλείαν οὐχ οἷόν τε ἐστίν, ἐὰν μὴ „ἔλθῃ“ καὶ „τὸ“ περὶ τῆς „γνώσεως“ καὶ „σοφίας“ „τέλειον“ τάχα δὲ καὶ τῶν λοιπῶν ἀρετῶν. (TLG 2042. 008. 2, lines 16-19.)

69、すなわち、いかなる状況のなかでも神への方向性を保つことを意味するからである。

オリゲネスはキリスト教が受容される以前の世界でキリスト教を講じ、キリスト教信仰ゆえに暴力を受け、しかし信仰者、また神学者として終生を過ごした。オリゲネスが徳と同時に信仰に言及することがあったのは、いかなる現実であっても、先にある希望に目を留めて今を生きる態度の表れであり、彼の思想も神への信仰、信頼に依拠した土台に根差していると言える。現実のなかに積み上げていく徳の実践は、徳の完成の将来にただ近づくだけでなく、そこから遡って今現在の生の歩みに意味を与える。ゆえに、将来だけに焦点を当て、現在を、ただ通過するだけの取るに足りない時と考えることは、徳の実践にふさわしくないのである。

オリゲネスが徳を神のわざと理解していたのは、それが愛であり、善であることをも意味するであろう。オリゲネスの徳実践が実際に愛を生じさせたことは、それに触れたグレゴリオス・タウマトウルゴスの変化からも確認することができた。

オリゲネスはこのような徳を完成させるよう努め、教えたが、徳は人間の不完全な状態との関連において提示されていた。完全な徳を目指しながら歩むのは、人間が不完全だからである。そしてそれを支えるのが神の恵みであり、模範となった御子キリストの存在である。オリゲネスはこれらに心を留め、自身の生を徳によって満たしていった。

「現在」を生きているかぎりにおいて最も現実的に重視されるのは、今の生を不完全ながらもふさわしく、すなわちキリストを模範に徳を実践しながら歩むことであり、オリゲネスにとって、それが今の生を歩んでいることの意味でもあったと考えられる。

オリゲネスの徳理解に学ばれわれもまた、同様に「現在」を生きる存在であり、状況が変化し、自身も変化し、すべてが揺れ動く現実的生のなかで、迷いながら生き方を模索する存在である。オリゲネスにおいて、善なる神への信頼、つまり信仰に基づく歩みは、直面する現実におびえ、苦しみなながらも、眼前の事実だけにとらわれず、それを超えた揺るぎない存在との邂逅を常に生じさせ、そこに徳という生の土台をもたらした。ここには、人間が、幻想ではなく目の前の現実を見据え、しかもそれを超えるリアリティに根差しながら、善をもって自らの生を引き受けて歩むことの幸いが示されている。それはすなわち、宗教の持つ根本的な力であり、ひとつの意義と言えるのではないか。

<凡例>

脚注では以下の略記を用いた。

ComJohn：オリゲネス『ヨハネによる福音注解』

ContraCelsus：オリゲネス『ケルソス駁論』

FragmJohn：オリゲネス『ヨハネ福音書断片』

HomNun：オリゲネス『民数記講話』

PeriArchon：オリゲネス『諸原理について』

PeriEuchs：オリゲネス『祈りについて』

OratPaneg：グレゴリオス・タウマトウルゴス『謝辞』

本稿ではこれらの著書名に続いて節番号を記載し、その原典に *TLG (Thesaurus Linguae Graecae, Irvine: UCLA, 2009)* を使用するさいには、節番号とテキストの行数を付記した。

---

69 オリゲネスはこの徳をキリストに帰し、キリストを徳の源泉、端緒とも称している。Cf. *ContraCelsus* V, 39; I, 57.

また、聖書箇所略記の原則は MLA に従った。

キーワード: オリゲネス、徳 (ἀρετή)、魂の進歩、神との合一、善

Key Words: Origen, virtue (ἀρετή), soul's progress, union with God, goodness